国際社会において、受容・発信する能力の育成　－その３－

筑波大学附属駒場中・高等学校　英語科
須田　智之・秋元　佐恵・多尾奈央子
髙橋　深美・八宮　孝夫・平原　麻子
山田　忠弘

国際社会において、受容・発信する能力の育成　－その３－

筑波大学附属駒場中・高等学校　英語科
須田　智之・秋元　佐恵・多尾奈央子
髙橋　深美・八宮　孝夫・平原　麻子
山田　忠弘

要約

今年度は本校SSH研究指定校第３期の３年目である。新規研究開発課題は「豊かな教養と探究心あふれるグローバルサイエンティスト(global scientist)を育成する中高大院連携プログラムの研究開発」となっており、その研究の柱の中には「国際交流や学会発表の場で通用する英語プレゼンテーション能力の育成」が位置付けられている。また、ここ数年で本校生徒が海外で研修をしたり、研究発表を行う機会が増えてきた。今年度は、東芝 TOMODACHI ACADEMY（東京）、台中高級第一中学校研究交流（台湾）、釜山国際高校訪問（韓国）等のプログラムが実施されている。この状況を踏まえ、英語科は普段の授業の中でよりいっそうのプレゼン能力向上を意識しつつ、外部からスピーチコーチを招くなどして標記の研究プロジェクトを進行させている。

キーワード：グローバル・サイエンティスト、英語プレゼンテーション能力、受容、発信

1. はじめに

1.1　英語科の授業構成

本校英語科では中高６ヵ年一貫教育の指導課程として、生徒の発達段階に応じ、６年間を基礎期［中１・中2］・実践期［中３・高1］・発展期［高２・高3］という３つの段階に分けて位置づけ、それぞれの特徴に応じた指導にあたっている。

授業構成は以下のとおりである：

中学１年生～中学３年生
「英語」４時間（LL・TT各１時間を含む）
高１　「コミュニケーション英語Ⅰ」３時間＋
「英語表現 Ⅰ」２時間　（TT1＋LL1）
高２　「コミュニケーション英語Ⅱ」４時間
（TT　１時間を含む）
高３　「リーディング」３時間（自由選択）
「ライティング」２時間（自由選択）

高校英語は教育課程の変更期であるが、本校は従来より「英語は英語で教える」ことやコミュニケーション活動を重視した教育を行っており、新学習指導要領の施行に伴い、特に新しい事を始める予定はないことを付け加えておく。

1.2　英語科の取り組みの指標

本校の学校教育目標は「本校の教育目標である『自由闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす』の理念にもとづき、生徒自らが学ぶ態度の涵養に努め、将来を担う社会のトップリーダーとして活躍できる能力と意欲を身に付けさせる」である。また、SSH研究開発課題として「グローバルサイエンティストの育成」が掲げられ、そのための手段として「国際交流や学会発表の場で通用する英語プレゼンテーション能力の育成」が標榜されている。

本稿では、まず本校の国際交流の機会について述べ、次にこの年度内のこれまでの英語科の取り組みを振り返る。

なお、英語科として国際交流を支援する取り組みについては、現在進行中のもの、および年度の後半で実施されるものがあるため、昨年の実践報告の一部を参考資料として挙げることとした。

2. 本校の国際交流

2.1　はじめに

本校はスーパーサイエンスハイスクール（SSH）として、海外の高校との研究交流実績を積みあげてきた。一昨年度からはさらに、国際社会での活躍を前面に押

し出した第 3 期目の研究開発に入ったところである。また 23 年度より筑波大学はその附属学校に対して「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」の 3 拠点構想を実現するよう求めており、この数年で本校生徒が国際的に活躍する機会が確実に増えてきた。

2014 年度の国際交流活動事例(年度内に今後予定されているものも含む)を以下に挙げる。

＜SSH 関係＞

a. 台湾台中高級第一中学との相互訪問
b. 釜山国際高校との相互訪問
c. 立命館高校 SSH 事業による、米国トマスジェファーソン高校、タイ国マヒドル・ウィタナヤソーン高校訪問

＜SSH 以外のもの＞

d. 東芝 TOMODACHI ACADEMY（東京にて日米の生徒が環境・社会問題について英語で討論）
e. EU 代表部による本校での勉強会
f. 日本学術振興会によるサイエンスダイアログへの参加
g. 筑波大学教員研修留学生との交流
h. イングリッシュ・ルーム

このように多彩な機会を通じて生まれる生徒の気づきを大切にしながら、英語学習にさらに意欲的に取り組んでくれることを願いつつ、日々の授業を展開している。

3. 各学年における取り組み

3.1　中学 1 年生（68 期）　担当：平原麻子

3.1.1　はじめに（基礎期のスタート）

小学校の英語教育は様々な問題をかかえつつも、それぞれの学校での取り組みが定着してきたようである。今年度入学の 68 期生にアンケートを行ったところ、ほとんどの者が、小学校１年生からなんらかの英語活動を経験してきた、と報告している。

そのためか、定点観測的に利用している英語音素聴解力テストを行ったところ、明らかに今までの生徒たちよりも耳が良くなっている、という結果が出た。また、ペア活動や発表活動に抵抗がなく、活発に自己表現する態度がすでに養われてきているように感じる。

その反面、つづりを覚える意識や分からないことへの抵抗感がないため（分からないことは聞き流してきたようである)、英語を「勉強する」という心構えを持たせることが、中 1 初期での重要な指導項目になっているように思う。

1 年間の授業を始めるにあたって生徒には、中 1 での到達目標として、①英語らしい音声を身につける、②積極的にコミュニケーションを図る人になる、③英語の論理に慣れる、の３点を示した。

3.1.2　授業の概要

3.1.2.1　授業の構成

英語の授業は週４時間あり、そのうち２時間を教科書中心の授業（＝英語の基本的な構造や論理、および語彙を学ぶ時間)、１時間をＬＬでの授業（＝聴解力を養う時間)、１時間をＴＴ授業（＝他の３時間で学んだことを実際に運用しながら、英語でコミュニケーションする力を育成する時間）と位置付け、指導を行っている。

3.1.2.2　教材

・2 時間の授業
　三省堂 *New Crown English series I*
　秀学社『耳からはいるペンマンシップ E-NAVI』
　数研出版『5-STAGE 英文法完成 BOOK1』
・ＬＬ授業
　Oxford University Press *Listen First*
・ＴＴ授業
　自主教材

その他、ＮＨＫ語学番組の『基礎英語１』聴取を推奨している。

長期休業中は読み物を課題として与えており、夏休みには Oxford University Press *Let's Go to the Rainforest*（ＣＤつき）を課した。評価は、内容に関する小テストと任意の１ページの暗唱テストで行った。

冬休みの課題は同じシリーズの *Things That Fly* を読ませ、内容に関する小テストとシャドウイングテストを行った。

3.1.2.3　教科書中心の授業とＴＴ

４月は、フォニックスを利用しつつ綴りと音の関係の確認や慣用句的な英語の表現などを中心に、小学校英語からの橋渡しを意識した授業を行った。

５月以降は教科書をベースに、be 動詞・一般動詞・色々な疑問文・命令文・can・because/when などの接続詞・現在進行形・過去形を順次取り上げ、知識ではなく道具としてこれらの文法事項を活用できるようになることを図っている。

教科書ベースの授業では以下のような授業構成が基本である。

1) 英語のチャンツや歌でウォーミングアップ

2) その日に取り上げる文法事項を使った活動
3) 教科書本文の確認

ＴＴ授業では、既習の文法項目を応用したスキット作りや発表活動を行っている。またプレゼン能力を積み上げるために、毎学期スピーチをさせて評価の対象としている。その際の指導ポイントは、Speak slowly, loudly and clearly. および Eye Contact である。その他、ジェスチャーや visual aids を上手に使うこと、なども指導している。

3.1.2.4　ＬＬ教室での授業

使用教科書 *Listen First* はＥＳＬ用のテキストであるため、その内容は、The Alphabet, Numbers, A Classroom, Time/A House, A Department Store, A Neighborhood, Health, The Calendar, The Weather 等、大変実用的にできている。中学１年生には語彙がむずかしく、スピードもほぼノーマルスピードであるためついていくのが大変だが、聴解力を鍛え現実の英語に触れるにはぴったりの教材である。

このほか、ＬＬ機器を活用してシャドウイングやディクテーション等の活動を行っている。またインターネットに接続し、教科書で触れたトピックにかかわる映像を見て理解を深めたり、英語字幕で *My Neighbor Totoro* を見る、など生徒が楽しみつつ自然な英語に触れることのできる機会を多く提供している。

またＬＬ教室では個人の音声を一斉録音できるため、この機能を利用して歌やシャドウイングのテストも実施している。

3.1.3　評価

評価材料の主なものは以下の通りである。
①期末考査
②小テスト
③ＴＴでの発表活動および audience sheet（聴衆として責任を持って級友の発表を評価するための用紙）
④ＬＬでの実技テスト（上述）
⑤普段の授業態度

このうち、③では毎学期のスピーチ課題として、１学期は「自己紹介」、２学期は「家族紹介（ペットも可）」をさせた。３学期は過去形を使うスピーチを課す予定である。

評価の柱が多くあるため、学期末にそれぞれの項目がどれくらい取れているのかが分かるような明細票を配布し、生徒各自が自分のできている点と、もっと力を入れたほうがよい点について意識が持てるように工夫している。

3.2　中学２年生（67 期）　　担当：秋元佐恵

3.2.1　はじめに

中学１年では、「英語と友達になろう」を目標に、“Hello, English!” という自作プリントを用いた。続く中２では、友達になった英語をより深く学べるよう “Enjoy English!”とタイトルを変えて、自作プリントでの授業をしている。授業は週４時間で、２時間がハンドアウトと教科書 *New Crown* をもとにした授業、１時間が AET とのティーム・ティーチング、１時間が *Basic Tactics for Listening*(Oxford)を用いたＬＬの授業である。

今年度の指導目標は以下の３つである。
(1)型の習得
　準動詞・比較・態・語順
(2)語彙の増強
　分野によっては高校レベルまで
(3)プロダクション能力育成
　エッセイとディベート
　以下、それぞれの目標について、授業例を紹介する。

3.2.2　授業での取り組み例

3.2.2.1　型の習得（暗誦コンテスト・日英暗誦）

語学学習において型の習得は必須である。これを
①良質なインプットを
②まず音声で
③大量に、という３つの方針を軸に行っている。

たとえば中２開始前に課題として渡した副読本 “In the Ocean” (Oxford)の例を紹介する。学年で生物が好きな生徒が多く、写真も楽しいので選んだ。まず生徒は音声を聴きながら、全ページ読みとおし好きなページ(60 語程度)を暗誦してくる。当然、イントネーションや発音も真似る。授業中は、そのページの写真をもって皆の前で暗誦する。生徒はクラスの中で上手だと思う生徒を二人選んで投票し、表彰する。これは英語が多少苦手な生徒も、全員、上手に行った。

その次の時間に、筆者が本文から選んだ１０の文を徹底的にリスニングさせる。１０個の選び方は、中２で習得すべき「型」や文法項目が入っていて、かつ音がリズミカルで覚えやすいもの。その後に「日英暗誦シート」を渡す。左側に日本語、右側に英語。

①波の下には見るべき素晴らしい世界がある。	①There is a wonderful world to see under

the waves.

②タコは色を変えることができる. ②An octopus can change color.

③サメは非常に危険になりうる. ③Sharks can be very dangerous.

この方法は数年前、高校生対象に始めたものだが、中位や下位の生徒も無理なくゲーム感覚で学習でき、その後の英作文やテストの答案を見ると、基本的な型の習得に効果があると言える。

3.2.2.2 語彙の増強

中１のときはかなり語彙を限定して出していたが、中２では生徒の興味に応じて、オーラルイントロダクションやティームティーチング、ディベートの際に、その分野に関する少し高度な語彙を紹介している。前回高校生を担当した経験から、高校生になって初めて出会う単語を少なくしたいと考えるためである。たとえば夏休みに読んだ *"Twenty Thousand Leagues Under the Sea"* (Pearson) のまとめとして、"Captain Nemo is a good man" という論題で、ディベートを行った。そのときには海や船に関する単語、映画版に出てきた抽象語など合計４０個ほどをシートにして配布、生徒はそれを見ながら意見表明を行った。現段階ですべてを active vocabulary にする必要はないが、今後も当該分野に関する語彙紹介を続けていきたい。

3.2.2.3 プロダクション能力の育成（エッセイ・ディベート・プレゼンテーション）

基本的には１つの単元や課題を終えるごとに、何かプロダクション能力を高める活動をしている。ここでは３つの活動を順に紹介したい。

まず第一にエッセイである。たとえば、教科書でオーストラリア・アボリジニの Uluru について学んだときには、Can we climb Uluru?という内容のリスニングをし、賛成・反対の意見表明を書かせた。

I don't agree with her. She said that people are all different, and we can climb it, but if it is true, we can do anything. For example, we can speak ill of other countries. So I think that's not true.

I agree with her because each person's idea should be respected. Anangu's opinion should be respected and also someone's opinion who decided to climb should be respected unless it isn't a bad thing.

第二にディベートを紹介する。２学期、比較構文をある程度学んだあとに、"Soccer is more exciting than baseball."という論題を与え、ディベートを行った。41 名を 3 人×14 チームに分け、Government と Opposition に分かれ、チームごとに１５分間話し合う。この間、最低３つの理由や証拠を挙げ、各スピーカーは１つの理由を発表できるようにする。その後、クラスの前に出て、２チームが対戦する。

①肯定側。主張＋理由１つ。
←否定側が反論できれば挙手（誰でもよい）。反論+理由。

②否定側。主張＋理由。
←肯定側が反論できれば挙手（誰でもよい）。反論+理由。

③肯定側。主張＋理由。
←否定側が反論できれば挙手。反論+理由。

これを６人終わるまで続ける。

残念ながら全チーム対戦する時間がとれず、優れた原稿を作ったチームも、発表させることができなかった。だが、意見の述べ方や反論の仕方など、新しいフレーズを学ぶ機会にはなったと思う。

最後に、プレゼンテーションの例を紹介する。２学期の最後、比較表現をさらに身につけるため、「グラフ・プレゼンテーション・コンテスト」を実施した。各自好きなグラフを探し、教科書で学んだ表現をもとに、グラフの説明および分析をするというものだ。原稿は 100～150 語程度、導入・分析・感想を述べる。教師は簡単なモデルを見せるのみで、原稿の訂正はしない。なお発表の際は、教材提示装置とプロジェクターを用いた。全員終了したところで、ベスト３を選び、投票。教育研究会にあたったクラスは、上位７名が舞台で立派なプレゼンを行った。

英語でのグラフ説明やデータ分析は、おそらく生徒たちが今後高校・大学・大学院やビジネスの場で、しなくてはならないものである。中２にしては高度な課題設定であったが、結果として全員がある水準以上の発表を行った。挑戦させて良かったと思っている。

3.2.2.4 LL 教室を使用した授業（担当：山田忠弘）

授業時間の半分で *Basic Tactics for Listening*(Oxford University Press) の１セクションを進め、
残りの半分は自作プリントを用いて、アクセント・発音問題、リスニング問題（1000 語レベルのリスニング教材を改題）、洋楽を用いた穴埋め聞き取り問題などを行っている。音声データやスクリプトは随時配布して復習できるようにしている。

3.2.3　今後の課題

インプット→インテイク→アウトプットの３段階を、いかに生徒に興味を持たせる形で授業形式に落とし込むか。とくにアウトプットをどのような形でさせるのが効果的か、ここ数年、自分の研究課題であった。今回比較表現を使ったグラフ・プレゼンテーションを試みた経験から、プロダクション活動を単元の最後に行うことは、生徒にとって、また教師自身にとっても、大きな達成感につながると実感した。今後も楽しく知的な表現活動ができるよう、その都度工夫していきたい。

3.3　中学３年生（66 期）　担当：須田智之

3.3.1　はじめに（実践期のスタート）

中学３年生では「Communication Skill としての英語運用力の完成」、「英語を使って世界と繋がる」、「英語の発想により慣れる」という３つの目標を年度当初に掲げた。最初の「英語運用力の完成」という部分はやや大げさであるかもしれないが、多くの生徒が「英語を使用言語とした学び」に耐え得る素地を確実に身につけつつある。その具体例をいくつか挙げると、長期休暇中に短期留学に出かける生徒が多く（中学３年生という時期的な要因もあるかもしれないが）いずれの生徒も英語圏での学びと生活を満喫してきた様子であった。また、総合学習の選択講座であるテーマ学習「Science Dialogue Jr.」の授業を見学した際には、参加生徒たちが海外からの若手研究者による英語での「数学研究とは何か」という講義に熱心に耳を傾け、問題に熱心に取り組む様子が確認できた。更に、昨年までの実践の成果からか、英語の歌や映画などを通して自分の学びを報告してくる生徒、インターネット等のメディアを通して自分の興味関心のある分野に関して英語で積極的に情報収集している生徒も数多くいる。

このような現状の中で、本校の英語授業での最終目標は「コミュニケーションの手段としての英語を身につけさせること」・「知識に留まらない英語運用力を養うこと」であると考え、実際の授業を組み立てている。

3.3.2　授業での取り組み

英語の週配当時間４時間は昨年までと同様に３つの要素から構成される。「教科書を中心に英語の基本的な仕組みを学ぶ時間」２時間、「LL 教室で聴解能力の訓練をする時間」１時間、「ALT とともに実際に英語を使ってみる時間」１時間という組み立てであり、今年は筆者が全てを担当している。以下に授業の概要を述べる。

(1)教科書中心の授業（週２時間）

New Crown English Series 3（三省堂）を基本的には使用しているが、題材の扱いの深度に強弱をつけ、教科書以外の発展的な内容も取り入れながら、英語での意味の伝達に重点を置き進めている。１学期は次の５課を学習した。

1. My Favorite Words (*Crown 3*, L.1)
2. Finland－Living with Forests (*Crown 3*, L.2)
3. *Rakugo* Goes Overseas (*Crown 3*, L.3)
4. Learning from Nature (*Crown 3*, Let's Read 1)
5. The Story of Sadako (*Crown 3*, L.4)

教科書を扱う際には、題材導入の会話部分は簡潔に済ませ、その後の読み物の部分を Oral Introduction / Interaction で教材を導入・内容理解を実施し、音読、まとめや発展的学習というスタイルを目指している。発展的学習の内容としては *Rakugo* Goes Overseas では Time Noodles という英語落語を扱い、最終的には生徒たちにグループで実演してもらった。また The Story of Sadako では *Sadako and the Thousand Paper Cranes* (Puffin Modern Classics)の一部分を扱った。

２学期に扱った教材は以下の３課である。

1. I Have a Dream (*Crown 3*, L.6)
2. Houses and Lives (*Crown 3*, L.5)
3. We Can Change Our World (*Crown 3*, L.7)

本校英語科では２学期教育実習生を受け入れることが多いのだが、実習生のリクエストでキング牧師を扱った L.6 からスタートした。発展的学習の内容としては L.6 ではオバマ大統領のスピーチ、L.5 では Tulou を紹介した UNESCO　TV の映像を見せた。L.7 では、ノーベル平和賞を受賞した Malala Yousfzai さんのインタビューやスピーチを教材として学習してから、教科書本文を補助的読み物として扱った。

３学期には教科書の L.8 の他、長編の読み物教材（題材未定）などを使用する予定である。

年間を通しての活動として、１学年時から継続して音声面強化と Warming-up、更には文法事項の導入を兼ねて英語の歌を紹介し歌うことにしている。１学期には映画『アナと雪の女王』の主題歌 *Let It Go* など、２学期には One Direction の *What Makes You Beautiful*、U2 の *Walk On*、ミュージカル *Wicked* から *Defying Gravity* などの歌を扱った。

(2)LL 教室での授業（週１時間）

LL 用コースブック Basic Tactics for Listening（Oxford 大学出版）をコースブックとして使用し、リスニング力の強化に努めると共に、教科書の題材に関連した映像や映画などの視聴も実施している。１学期は『アナと雪の女王』を英語字幕とともに見せた。２学期には『４２　世界を変えた男』を、また期末テスト後のテスト返し期間には『大統領の執事の涙』を見せたが、前者は野球（スポーツ）という視点から、後者はホワイトハウスで歴代大統領に仕えた黒人執事の視点から、人種差別について教科書の内容についてより発展的に深く学ぶ機会になったと思う。

(3)ティームティーチングの授業（週１時間）

アメリカ人講師の ALT と共に行う授業で、語彙力増強を図りつつ、新出の文法事項の定着とともに実際に使える英語力の育成を目指している。校外学習や文化祭などの学校行事についてなど、自らの経験について英語で表現できるように、１年間の中でその時々にふさわしい題材を取り上げるようにしている。

3.3.3　その他、授業外での取り組み

(1)English Journal

昨年度から生徒に自由英作文用のノートを一冊持たせ、時折テーマを与えながらある程度まとまった分量の英文を書く指導を継続している。これまでのトピックは岩手県での校外学習について、GW の出来事、夏休み日記、文化祭の招待状作成などである。また、長期休暇の際の自由課題として、日頃から紹介している英語の歌や映画紹介などについて自ら積極的に感想・紹介文を書いてきてくれる生徒も多い。また３学期には、中学校 3 学期年間の英語学習の総まとめとして、英語文集の作成を予定している。

(2)パフォーマンステスト

学期ごとのパフォーマンステストとして、英語による発表活動を行っている。１学期には英語落語 Time Noodles をグループで実演してもらった。前述の短期留学に出かけた生徒たちは発表会で実演し、立派に現地の方々の笑いをとってきたそうである。２学期にはキング牧師の演説 I have a Dream と Malala Yousfzai さんのスピーチのどちらかを選択させ、その一部分を覚えてグループで発表させたが、こちらも堂々とジェスチャーを交えて暗唱する姿が多く見られた。

(3)副教材など

英語力を定着させるためには週４時間の英語の授業（＝総計 200 分）だけでは足りないのは明らかである。生徒には NHK ラジオ講座『基礎英語 3』または『ラジオ英会話』）などの聴取を奨めている他、文法学習用の自習用教材としては『マーフィーのケンブリッジ英文法（初級編）新訂版』(Cambridge University Press) を、リスニングの追加教材として長期休暇の読み物教材は音源の付属しているものを選ぶなどの工夫をしている。

(4)多読・多聴

長期休暇の課題として、夏休みには *Martin Luther King* (Oxford Bookworms, Stage 3)を、冬休みには *Romeo and Juliet* (Oxford Bookworms, Stage 2)を、音源を聞きながら読ませるとともに、それぞれの一部分をディクテーションするなどの課題を課した。その成果を LL での授業で確認したが、かなりの分量の英文を聞き、書き取る力をつけている様子であった。

3.3.4　今後の課題

生徒たちが主体的に学習に取り組むためには、学びへの好奇心が掻き立てられる状況や学びによって得られる感動や充実感が必要であろう。残念ながら、特に 1 学期の授業では扱った教材をそのレベルまで掘り下げられなかったと感じている。英語が日常生活の言語として使用されていない環境では、学習者自身の中にその言語を習得するための強い意志や習慣を身につけさせるとともに、その言語を実際に使用する機会をできるだけ多く設ける必要があるだろう。

「国際社会で発信する能力の育成」をめざし、授業と生徒の自主的な学習の相互作用をいかに深めていくか、また、塾などでの学習に強く依存している生徒が多数いる現状の中で、生徒たちの興味関心を喚起する教材や、生徒たちが英語を実際に使用しながら身につけていく場面をいかに多く提供していくかが今後の課題である。

3.4　高校１年生(65 期)　コミュニケーション英語Ⅰ

担当：八宮　孝夫

3.4.1　はじめに

本校の生徒は、様々な分野に関心を持っている生徒が多く、英語が必ずしも得意でなくとも、扱う題材によっては、教師が知らないような情報も出てくることがある。ある課の本文を基本にしながらも、それにプラスアルファするかたちで知っていることや調べたこ

とを加えて授業が展開できたら素晴らしいと考え、以下の実践を行ってきた。

3.4.2　１学期の実践・入門編

筆者は65期生の英語を中１から担当しているが、高校生を担当するにあたり、４１名の新しい生徒を迎えることになった。Oral introductionにより英語で本文の背景知識や新語などを導入していくやり方になじませる目的もあり、比較的平易な世界の偉人を２人最初に扱った。「偉人」というのは、背景知識も含め、比較的詳しい生徒がいる分野でもあり、「はじめに」で述べたような目的とも合致しているため採用したのである。((1), (2)の題材とも、NHKの語学講座 *Enjoy Simple English* 2014年４月号より)

(1) The Wright Brothers

Enjoy Simple English は難易度的には、中３のはじめくらいのレベルであるが、ほぼ５分間英語を聴き続けなくてはいけないので、やはり聞くべきポイントを示す必要がある。また、固有名詞が出てくるので、Oral Introduction でそのあたりを押さえることにした。まず最初に兄弟の幼年時代が話題になり、Orville と Wilbur というファーストネイムが出てくるので、まず２人の幼年時の写真を提示し、誰なのかを問いかけながら、ライト兄弟であることを紹介し、Dayton, Ohio という彼らの町を導入して以下のリスニングポイントを提示した。

1) Wilbur and Orville --What did these boys like to do?
2) Contest --What contest did they take part in? Did they win any prize?
3) When they grew up, what did they open?
4) What was their dream?
5) When (and where) did their dream come true?
6) What was their record?

このあと５分間の音声を聞かせ、単に解答合わせでなく、生徒とのインタラクションを通じて、別紙資料のようなイラストを貼りながら、話を構築していった。

２時間目には、図書館に行き、どのような英語関係の辞典・事典や参考資料があるかを「ライト兄弟」を例にクイズ形式で見ていった（ライト兄弟に関する英文資料を７点ほど載せたプリントを配布し、７班それぞれに当てた資料がどの参考図書に載っているか推測させながら、その参考図書を制限時間内に取ってくるという課題である）。掲載した資料は *Oxford Children's Encyclopedia,* Dorling Kindersley の *Illustrated Encyclopedia,* DK の *Eyewitness Guide* 、*Encyclopedia Americana* など。また、図書館にはなかったが、筆者が信頼を置いている *Encyclopedia Britannica* の The Wright Brothers の項目も加えた。

３時間目には、この *Britannica* の英文を読みながら，事典に用いられている略号（例えば b. Aug. 19, 1871 – d. Jan. 30, 1948 における b=born, d=died など）も検討した。また、板書に用いたイラストを生徒に配布し、イラストを見ながら話を再現(reproduce)することを課題にした。その際、今回読んだ参考資料などで付け加えるものがあるとさらに良いと指示した。

４時間目には、ボランティア・ベースであるが、各クラスで発表者を募ったところ、数名が出てそれぞれプラス・アルファの情報を入れてくれた。単純なものではライト兄弟は終生独身であったこと、より重要なものとしては、それ以前から飛行機で飛ぶ試みはあったものの、ライト兄弟がほかと決定的に違ったのは上下・左右に方向転換と左右の羽根の上下という３方向(three axis)をコントロールするという点であると指摘したものもいた。(発表しなかった生徒にもサマリーは提出させた)

(2) Florence Nightingale

基本的には、The Wright Brothers と同じ手法で、導入し、インタラクションして理解を確認し、最後はイラストを示しながらサマリー・プラスアルファをさせた。こちらでは、プラスアルファの情報は自分で調べて入れなくてはならない、という点が応用であった。

3.4.3　高校の英語～行間を読むこと

(3) Railroad Man

２篇の偉人伝を扱ったので、次は市井の黒人鉄道員の話である。米国のエッセイスト Bob Greene の作品で、筆者はこれを高１の今ごろ過去数回にわたって使用してきた。米国で鉄道の黄金時代に車内の給仕として就職し、花形のスーパーチーフ号などでも活躍したが、鉄道が斜陽になるに連れて、最古参の一人として働くも、鉄道が民営化(Amtrak)になってからの社員には忘れ去られた存在で、誰に褒められることもなく退職を迎えた、という話である。最後の日の淡々とこなし、誰にも例も言われず、駅舎を去るという結末は、読み方によってはもの悲しい印象も与える。事実、この話を「黒人差別の中の悲惨な話」と捉える生徒が圧

倒的に多い（これまで教えてきた経験上）。つまり、非常に道徳的というか社会問題として捉えてしまうのである。しかし、この話の全体のリズムは決して暗く重苦しいものではなく、仔細に検討していくと文章の端々に、花形の列車で働いてきた自負、どんなに斜陽になっても淡々と自分の仕事をこなすプライドが感じられ、Bob Greene の意図も、その work ethic にあることがわかってくる。通り一遍でなく、まさに「行間を読む」必要性のある文章で、その点で、今までとは違う高校の英語への導入として、意味のある教材と考える。

今回も、ゴールデン・ウィークの連休前に本文全体を配布し、いくつか質問事項を付して読後感を書かせる課題を出した。案の定、「非常に悲惨な話」「こういう結末の人生は送りたくない」という感想が圧倒的であったが、どのクラスにも数名、「悲しい最後かもしれないが、自分の仕事に満足し達成感を覚えていると感じる。私も自分が最後納得できる仕事を探したい」という意見もあった。

授業では、主人公の自負を示すような表現などに目を向けさせることにそれとなく持っていったが、難しいのは「黒人差別の話」とした読みを全く間違った読み方と決め付けることはできない点である。本当は、こういう教材こそ、事前に課題として読後感など書かせずに、教室で議論をさせて、その中で生徒同士が段々と「行間の読み」の大切さやキーワードとなるような表現に気づいていくことが大切なのではないかと実践後、反省をしている。

(4) Beowulf

まだアングロサクソン人が北欧にいた頃の英雄伝であり、古英語の代表的の叙事詩と言って良い作品である。もちろん、原文では無理なので Black Cat 社のリトールド版を使用した。北欧の王様その他の固有名詞が少々厄介であるが、デーン人の国をグレンデルという怪物が襲って支配しようとするのを、北の国からの英雄ベオウルフが退治し国を守るという、筋としては比較的単純なものである。付属 CD も臨場感に溢れているので、各章の背景を Oral introduction し、リスニングポイントを提示することで、速読教材の代わりとなりうるものである。Railroad Man は、行間を読むような細かい読みをしたので、この教材ではある程度のスピードで筋をとっていく読みを目標とした。

(5) Forest for the Future

１学期の最後は、教科書の Lesson 4 を扱った。少し、人物伝に偏ってしまったこともあり、環境問題のような社会的な読み物も必要だと感じたからである（筆者は、基本的には１つの学期に文学的なもの、社会問題的なもの、科学的なものの３種類を扱う事を心がけているが、この学期はその点では「科学的」読み物が抜けてしまったことになる）。

これはマダガスカル島（とアフリカの一部）に特有なバオバブの木が人々の生活環境によってどんどん伐採され、これをなんとか再生しようという話である。マダガスカルという、あまり馴染みのない国の地図やバオバブの木の写真など提示しながら、oral introduction を行いながら導入した。“Sisal”（サイザル麻）という言葉が出てくるが、私自身どのような材質のものかピンと来なかったが、それを使用したバッグの写真を提示すると複数の生徒から、母親が使用しているという反応が返ってきた。

3.4.4　１学期末のパフォーマンス・テスト

筆者は、期末考査の成績は全体の８割とし、残りは平常の課題や発表で評価している。パフォーマンス・テストは学期末に行うもので全体評価の１割を占める。今回の課題は

①バオバブの木について、なぜ倒れたかをイラストをさしながら説明し、最後に自分の意見を述べる。

②１学期に扱った題材の中で気に入ったものについてコメント、なぜそれが気に入ったか、プラス情報など。

という、いずれかの選択制にした。

およそ半数の生徒は、①を選び、黒板に貼ったイラストを指しながら、本文の概要を説明し、それについてのコメントを述べるという形であった。

しかし、②を選んだ生徒は、バリエーションに富んでいた。例えば、The Wright Brothers を踏まえて、日本で初めて飛行機を作った人物「二宮忠八」についてレポートした例、映画「紅の豚」で主人公のライバルの名前(Donald Curtis)が、ライト兄弟と飛行機を作る上でライバルとなった人物の名前(Glenn Curtiss)から来ていることを説明した例、Nightingale では、“Nightingale of Japan”と呼ばれた新島八重についてまとめたもの、Beowulf との関連で北欧神話について言及したものもあった。

ここでは、Railroad Man の読後感として発表した例をあげる。

The most impressive story of this term is “Railroad Man.” Is this story a happy ending or a

sad ending? Charles Ford could get a job he really wanted to, worked very hard and serve many people, including VIP, in this sense, he led a happy life. However, because of that, he couldn't use a lot of time for his family. Besides, at the end of his work, his name was never recalled. So he led a sad and unhappy life. From only this, I can't judge this problem. What is happiness? World famous Dostoyevsky said, 'Happiness does not lie in happiness but in the pursuit of it.' And Einstein said, 'Life is like a bicycle.' Thinking from these words, aim – aim is essential in our life. Judging from this standpoint, he led a happy life. That's because he worked with his aim and after retiring his job, he found another aim in his life. I think we all have different dreams. Whatever we dream, we should or must live a happy life. Thank you.

ただ単に読み物として、筋を取るだけでなく、「幸福とは何か」という１つ上のレベルで考えたことに大いに意味があると思われるし、それをほかの生徒もシェアできた点で有意義であった。

3.4.5　2 学期の実践について

2 学期の実践について、概略する。

(1) El Sistema　〈社会系〉

教科書の L.7 で、ヴェネズエラの、音楽を通じた人間教育システムとまたそれを提唱した Dr. Abreu について扱った課である。実際には、担当した教育実習生と相談しながら、実習生に授業をしてもらった。

この課でのポイントは、ヴェネズエラの社会状況を背景知識としてどう実感させるか、ということで幸い、昨年の Com 英語 I 担当者が、El Sistema のドキュメンタリービデオ（スペイン語版だが英語の字幕あり）を購入しておいてくれたおかげで、町並みの様子や犯罪率、El Sistema から生まれたオーケストラの演奏、何より Dr. Abreu へのインタビューが参考になった。実習生も後半非常にがんばり、ただ本文の解釈に終わらせず、"The important moment of my life"のようなテーマで、これまでの人生で転機となった出来事について、生徒に英文のパッセージを書かせ、一部の生徒には発表をしてもらった。なお、実習生の授業が終了した後、まとめとして CBS ニュースの 60 Minutes にあった El Sistema の特集を扱った。音声だけを取り出し、リスニング形式でキーワードの書き取りを行った。Lennar Acosta という、教科書本文に出てきた犯罪者から El Sistema によってクラリネットに出会い更生した人物の話も出てきて、教科書に現実感をもたらすことが出来た。

(2) The Body　〈文学系〉

夏課題として読ませたものを、映画版の *Stand By Me* を鑑賞しながら、復習をした。Penguin 版の retold とはいえ、原作の雰囲気をよく伝えており、また１学期に扱った文法項目（仮定法、分詞構文、with 構文、など）もたくさん出て来て格好の復習となる。また、内容については、英文サマリーを作り、穴埋めをすることで確認をした。原作と映画版では、共通点も多いが、決定的な場面で異なっているので、どちらの方が好みか、その理由は何か、などの発表をさせた。

(3) Medusa, Perseus and Andromeda　〈文学系〉

筆者は、ギリシャ神話は英語文化の大切な要素と考えているので、教科書にない場合でも必ず投げ込み教材として扱うことにしている。59 期のときと同様、『ギリシャ神話』（成美堂）の Medusa, Perseus and Andromeda を扱った。ギリシャ神話を扱う場合の厄介な点は、それぞれの神様の名前がギリシャ語名とラテン語名がある点である。「ギリシャ・ローマ神話」と呼ばれる所以である。日本では「ゼウス」「ポセイドン」など、ギリシャ語名が用いられているが、英語世界ではむしろラテン語名のほうが関連している例が少なくない。まず、惑星名からして Mercury, Venus, Mars, Jupiter, Saturn, Uranus, Neptune, (Pluto)である。どちらで扱うにしても、ごちゃ混ぜにしないで、どちらかを一貫して用いるべきであろう。本教材ではラテン語名を用いている。

今回は、『ギリシャ神話』がベースとしている Ovid の *Metamorphoses*（日本語名『変身物語』）（Rolfe Humphries 英訳）の該当する部分を読んで授業準備をし、最終的にはペルセウスと海獣の戦いの場面は、Ovid の英訳の韻文も示してみた。

また、DK 版の *Myths & Legends*（Philip Wilkinson 著）を図書館で購入してもらった。これは見開き 2 ページで、ギリシャ神話の有名なエピソードの顛末や関連事項がまとめてある優れた本である。ここからペルセウスがメッドゥーサの首を奪うことに至った前日譚についても引用し、発展として扱った。

(4) Why Are You Sleepy?　〈科学系〉

教科書の L.8 で、眠りのメカニズムを扱っている。

睡眠は誰にも関わることであり、レム睡眠、ノンレム睡眠という用語も一般常識としてあるだろう。しかし、レムが英語のフレーズの省略形ということは必ずしも自明のことではないし、睡眠中、どんなサイクルで睡眠が起こるのかもそれほど知られていることではない。つまり、適度に背景知識がありながら、そこから未知の話題を導入するのも比較的適した教材と言える。また、年齢別の睡眠パタンの図を提示など 1 学期の Forest for the Future と同様、イラストによってサマリーを作るのにも適した教材である。

まとめとして、『攻略！　英語リスニング』2014 年 4 月号の Sleep を扱ったもののリスニングを行った。

通常、課の終わりのサマリーは穴埋め問題程度であるが、それでは本文について英語で語ったことにならない。板書で用いた絵を利用して、部分的にブランクにした文章を完成させ、読みの練習などした後、前に出させて板書の絵のみを助けに各自発表を試みた。あまり練習の時間がなかったせいか、その時はあまり徹底しなかった。結局、ブランクを完成させた文章を練習して暗誦してしまえば、あまりイラストを助けに説明するという目的とは違って来てしまう。かといって、何もお手本になるものがなければ、練習も出来ない、という一種の矛盾が、発表活動を徹底できなかった原因であろう。このことについては、また後で触れる。

とにかく、これで 2 学期も、「文学的なもの」「社会問題的なもの」「科学的なもの」の 3 つを扱ったことになる。

3.4.6　2 学期末のパフォーマンス・テスト

１学期同様、２学期に扱った課を踏まえた以下のような課題を出した。

内容：以下のうち１つを選び、スピーチする。

① El Sistema をはじめた Dr. Abreu の考え方をまとめ、それについて意見を述べる。

“Music and I” などで、音楽と自分との関わりをスピーチしても良い。

② ギリシャ神話について、うんちくを語る。(他の有名な英雄のエピソード、冒険など) 神の名前や関係など、難しいので略図の用意を)

③ Why Are You Sleepy? の流れを、イラストを用いてサマリーし、感想を述べる。(睡眠によって、何か技術が伸びた経験があれば、その実体験、the strangest dream I have ever had など)

一番多くの生徒が選んだのは③であった。期末考査後の実施ということで、１度目に行ったときよりはるかに練習をして臨んだ生徒が多かった。サマリーのときの文章とほぼ同じ内容の発表も多かったが、一方で 2 分という限られた時間なので、内容を取捨選択したり自分の言葉で表現したり、という例もあった。(4) で触れた矛盾も、時間の制限などにより生徒が工夫しうるということがわかった。

発表の一例として、ある生徒は一連の説明をした後で “This is my sleep pattern” と言って、睡眠中の眠りの深さの折れ線グラフを提示して説明した。授業で扱ったものほど細かいものではないが、スマートフォンのアプリとして最近は枕元において眠ると寝返りなどをもとに大まかなパタンが出るのだという。

また、ギリシャ神話では Hercules, Orpheus & Eurydice, Arachne の話など紹介した例があった。特に織物の名手で最後にクモに変えられてしまう「アラクネー」については、筆者も初めて聞いたエピソードであった。その例を挙げる：

Hello, class.

I'll introduce about Arachne, who is the character of Greek mythology. She was a beautiful girl and famous for being a very skillful weaver and spinster. However, Arachne was a vain girl and dared to compare her skills with Athena, the goddess of weaving.

When Athena heard these words, she disguised [herself] as an old lady and advised Arachne not to say such a thing, but Arachne didn't follow the advice and incited Athena to compete with her. At that moment, the old woman transformed herself into the goddess of Athena. Soon the competition started. Arachne's work seemed to be perfect, yet it was not beautiful because it was showing insult of gods. When Athena saw this, she got very angry and transformed Arachne into a small and ugly animal, which nowadays is known as the spider. I think some Greek gods like Athena are sometimes too brutal. They should be more friendly to mortals.

このような機会を通じてクラスで様々な話を共有できるのはよいことであろう。

筆者が今回一番印象に残ったのは “Music and I” と題した生徒の発表であった。音楽祭の特別参加団体として管弦楽団でチェロを担当したのはその生徒と講師をしている先生で、その方は比較的最近になってチ

ェロを始めたのであった。生徒いわく、“Our orchestra had only two cellists, me and Mr. T who taught us history. I think he didn't play very well but he enjoyed playing the cello very much. It's the most important. Before everything, if you can enjoy music, it's special!”

日頃は、ひょうきんなキャラクターで通っている生徒が真剣にこのスピーチをしたとき（原稿に頼らず、視線もよく上がっていた)、クラス全員が彼の別の面を見たように大きな拍手をしたのであった。

3.4.7　おわりに

パフォーマンス・テストの例が示すように、授業で扱った教材を踏まえて、それに関するうんちくや調べたことを発表することは生きたコミュニケーション活動になりうる。日々の授業時間に、毎回それができるわけではないが、oral introduction / interaction を通じて、背景知識などを生徒とやり取りする中で、教材を膨らませることができたらと考えている。

3.5　高校１年生（65 期）英語表現Ⅰ

担当：山田忠弘

3.5.1　はじめに

英語表現Ⅰ(2 単位)は 1 単位分を LL 教室を使用した授業とし、もう 1 単位分は TT で行っている。

3.5.2　LL 教室を使用した授業

授業時間の半分で *Expanding Tactics for Listening*（Oxford University Press）の１セクションを進め、残りの半分は自作プリントを用いて、アクセント・発音問題、リスニング問題（１学期は TOEFL 問題集の短文ディクテーション、２学期はショートストーリーを聞いて問いに答える)、洋楽を用いた穴埋め聞き取り問題などを行っている。音声データやスクリプトは随時配布して復習できるようにしている。

3.5.3　ティームティーチング

１学期は「自分の意見を英語で言う」ことを目標に、テキストブック *Solutions*（CENGAGE Learning）のトピック（Bicycle Licensing?など）について、３～４人のグループで意見を発表させ、ALT と共にコメントをした。

２学期は「相手の意見に反論する」ことを目標に、与えたトピック(resolution)にまずは意見（supporting reasons）を考えて発表させ、別のグループにそれに対する反論を行わせた。2 人の教員と生徒によってどちらのチームが優れていたかジャッジを行い、学期末の評点の一部にした。必要な語彙や表現については、*DISCOVER DEBATE*（Language Solutions Inc.）を参考にさせた。

3.6　高校２年生（64 期）コミュニケーション英語Ⅱ（3 単位分）　担当：高橋深美

3.6.1 はじめに　（発展期のスタート）

本年度から高校２年生が新指導要領に移行し、従前の英語Ⅱがコミュニケーション英語Ⅱに再編され、教科書類も一新された。

本校のコミュニケーション英語Ⅱは 4 単位であるが、3 単位を教科書類を中心とした学習に当て、1 単位をティーム・ティーチングとして行っている。

本校で使用している教科書は　UNICORN English Communication　2（文英堂）である。この教科書は 12 課からなり、それぞれの課が、4～5 つのセクション、文法解説、Exercises、Supplementary Reading から成り、他に For Reading が数ページある。授業では教科書のレッスンをいくつか選んで扱うほか、別のリーディング教材の読解、スピーチ等を取り入れている。文法は必要に応じて説明するにとどめており、語彙、文法の補強として、付属のワークブックを持たせ、各自で取り組むこととしている。

3.6.2　授業での取り組み

3.6.2.1　1 学期

筆者は高校１年時より継続して現在の学年を担当しているため、春休みに Penguin Readers の Hamlet を課題として、レポートを提出させた。レポートは「隣り合っていない 2 つの章から、よかったと思う場面を取り上げ、なぜよかったと思うか」について英語で述べるものとした。やはり最期の決闘の場面を取り上げた生徒が多かったが、一方でオフィーリアが登場する場面を取り上げた生徒も少なくなかった。この課題に関する Follow up として、Hamlet の独白 7 か所を中心に映画を縮約して見せた。

このほか 1 学期前半は次の 3 課を学習した。

L.1　Through the Eyes of Imagination
L.3　The Debate Girls
L.4　International Space Station

L.1 は錯視を取り上げていたので、様々な錯視の例を示し、例えば、これとこれは実は合同である、ということを電子黒板を使って、画像の一部を切り取って

並べて見せるなどの工夫をしてみた。

1 学期後半は A.A. Milne の *Winnie-the-Pooh* の第 6 章と第 8 章を教材として使用した。*Winnie-the-Pooh* は原文は必ずしも難解ではないが、格調の保たれた英文であり、随所に言葉遊びが散りばめられている。教科書からほのぼのとしたものが消えている現在、内容的にも適した教材であった。

3.6.2.2　2 学期

夏休みに Oxford Bookworms の *Wuthering Heights* を課題にした。原文は長編であるが、Bookworm でも 23,000 語あまりになる。このくらいのものを読み終えたことで自信につながった生徒が多かったようである。これについては夏休み明けにテストを行い、Follow up として原文の一部を紹介した。

このほか２学期前半は次の３課を学習した。

L.2　The Problem We All Live With
L.7　The Power of Choosing
L.8　Global Water Issues

L.2 はニューオーリンズで初めて Integrated School となった小学校に通う Ruby Bridges の話であり、この登校風景は Norman Rockwell の絵で大変有名である。授業では Norman Rockwell のその他の絵と共に、The Story of Ruby Bridges (絵本) を全編提示した。

2 学期後半は The Diary of Anne Frank の一部を抜粋して学習している。アンネの日記はよく知られた作品であるが、約 20 年前にそれ以前の版では省略されていた個所を補填した完全版が出版されており、その英語版を読解教材として用いている。アンネの日記には真贋論争があり、またオランダ語で書かれたものを英語に翻訳する過程でどのような語彙を選択したかで印象はだいぶ変わってしまうが、それを踏まえた上で教材としてる。

3.6.2.3　スピーチについて

昨年度のコミュニケーション英語 I では、各学期に 1 回全員がスピーチをすることとしたが、コミュニケーション英語Ⅱでは別にティームティーチングもあるので年間 2 回とし、1 回目を 10 月上旬に実施した。“My Resolution for the School Festival” “The Book I Recommend” “The Problem We All Live with” より 1 つを選択して、1 分 10 秒～1 分 20 秒程度のスピーチすることとした。スピーチは場数を踏むと上達する活動の一つであり、まだ原稿を読みがちな生徒も少なくないが、「課題であるのでしかたない」「とにかく自分の話すべきことを話し、さっさと席に戻りたい」という話者の気持ちを感じさせるスピーチはほぼなくなった。

今回はオーディエンスシートに個々のスピーチの感想を書かせ、筆者が点検したのち、それぞれを切り分けて話者に配布してみた。これにより、自分のスピーチは思いのほかきちんと聞かれていることを認識し、次回のスピーチに向けてモチベーションを高めた生徒が多いように感じられた。

3.6.3 今後の課題

4 技能の伸長が英語科の科目の目指すところであるが、スピーチやレポート以外に「話す」「書く」作業量がどうしても少な目になるので、他の技能と関連づけてできるだけ取り入れていきたいと考えている。

3.7　高校２年生（64 期）コミュニケーション英語Ⅱ TT（１単位分）担当：秋元佐恵

3.7.1　はじめに

高校 2 年生の 4 単位中の 1 単位で、ALT とのティーム・ティーチング(以下 TT)により、主にスピーキング訓練をするための時間である。４１人でなるべく多くのアウトプットの機会を作るように、スピーチやプレゼン、ディベートを行っている。

3.7.2　学期毎の授業展開

(1) 1 学期

１０回の授業で行ったことを紹介する。

①自己紹介：Three Favorite Things of Mine

筆者にとっては初めて出会う生徒達であるが、生徒同士はすでに互いをよく知っている。そこで、好きなもの３つを紹介して、自分をプレゼンする、という方法をとった。ALT が自己紹介で３つを板書したのに倣い、生徒達もひとつずつ書きながら自己紹介する。好きなものの取り上げ方が人それぞれで、大いに盛り上がった。

②ミニディベート

２学期から始めるディベートのための訓練。相手の意見表明に対して、意見の出し方(Signpost + Reason + Support)、反論の仕方(Not true / Not significant / Not relevant)などをペアで練習した。主に参考にしたのは “Discover Debate”(Language Solution Inc.)。

③関西旅行スピーチ:The most impressive place
５月の関西旅行のあと、最も印象に残った場所やものについて、実物や写真とともに紹介してもらった。制限時間は２分。

④エッセイ：My Hero
自分にとってのヒーローはだれか。ちょうど最初の自己紹介で、その話をした生徒がいたので、それをヒントにして単元とした。ヒーローに関する文章を読んで、ヒーローとはどんな人物か、定義を話し合ってから、３０分で書かせた。本当はスピーチがよかったのだが、短縮授業の都合でライティング課題となった。生徒たちの結果としては、

第１位　スポーツ選手（39 名）
第２位　映画・アニメ・小説の主人公（34 名）
第３位　作家・小説家（12 名）
第４位　科学者・数学者（11 名）
　　歴史上の人物：政治家や武将（11 名）

ちなみに個人別で最も多かったのは、Steve Jobs（8 名)であった。

(2) ２学期
主にディベートを行っている。筆者が夏のワークショップでパーラメンタリー・ディベートを学び、それとアカデミック・ディベートを授業用につくりかえて行っている。これまで行ったのは、

①モデルディベート
携帯電話に関する論題で、パーラメンタリーディベートの構造を学ぶ。

② ディベート体験
“We should abolish the death penalty.”という論題で、Government と Opposition に分かれて対戦。

③ Summary and Refute
「実際にやってみて一番難しかったのは、反論をその場で考えること」という生徒の声により、この練習をした。（別の生徒から提案のあった練習法である）。４人チームで、相手の言ったことをまとめて、反論、というのを繰り返していく。テンプレートを渡したこともあり、スムーズに進んだ。

④ディベート映画研究
小休止もかねて、ディベート映画（？）の名作、“Twelve Angry Men”を鑑賞、死刑制度に関する語彙増強や、リスニング、最後にエッセイライティングを行った。

⑤ディベート・テスト
41 人を 12 チーム（３～４名）に分け、6 つの論題で、ディベートを行い、それを ALT が評価する。見ている人はジャッジとなり、「ジャッジ・シート」を提出。論題は以下の６つ。

(1) Domestic travel is better than traveling abroad for a school trip.
(2) Studying abroad is better than studying at a university in Japan.
(3) A robot dog is better than a real dog.
(4) Space exploration is a waste of money.
(5) All-boys schools are better than co-ed schools.
(6) The Japanese government should abolish nuclear power plants.

生徒は事前に論題を選び、どちら側になってもよいように、準備してくる。当日その場で、Government か Opposition かの発表をする。これはパーラメンタリーディベートとは異なるが、1 時間で 2 チーム(20 分程度)をやるとなると、15 分間の準備時間をとることはできない。そこで苦肉の策でこのようにした。生徒たちは完全に準備してくることはできず、相手の反論にはその場で答えなければならない。これまで６回の対戦を終えて、評価するにはこの方法で良かったと思っている。

3.7.3　今後の課題

今のところ、生徒はディベートの構造を習得し、よく準備して対戦している。ただ、パーラメンタリーの方法で今後も続ける場合、ジャッジの方法や、教室での公平な試合方法（大会でのように、全チームが同時展開できれば一番良いのだが、それは不可能）をさらに研究していかなくてはならない。

なお、パーラメンタリー・ディベートに関して、大阪府立大学・中川智皓助教には、いろいろな場面でアドバイスをいただき、お世話になっている。この場を借りて感謝申し上げる。

3.8　高校 3 年生（63 期）リーディング

担当：多尾奈央子

3.8.1　はじめに

６年間のシラバスのなかで最終段階の「発展期」最

終学年の高校３年生。本校では高校３年の英語は選択授業となるため、各クラスの受講者数は減り、教科名も「リーディング（３単位）」「ライティング（２単位）」の２つとなる。筆者は上記２種両方を担当した。ここではリーディングについて述べる。

3.8. 2　教材と授業での取り組み

これまで本期生の教科指導を中１から担当し、継続して留意した点を本年度も引き継いだ。つまり、高 2 までに得た知識を場に応じて実践力として使用できる力を着ける学習の「発展期」として、いかなる経路でのインプット・アウトプットであろうと場面や状況に応じた語彙・表現等を適切に選択して運用できる能力の醸成をねらい、インプットにおける場面をでき得る限り現実味の高いものにして各言語材料を自分のことと捉えられることに重点を置いた。最終目標には、英語を通して得た情報を自分の言葉で整理し、他者に分かりやすく伝えられるようなアウトプット力を付けることを設定した。

具体的な授業内容は、様々な分野・文体の英文を読み、問題演習で進めた。クラスには進路希望の文・理双方が混在するので英文分野に偏りがないように注意し、いずれの進路希望でも外国語で文章を「読む」際に正確に読み取り、他者へ自分の言葉で伝えられるまでに理解できるようになることを目標とした。

使用教材は 700~900 語の英文を以下の書籍から選択し、自作のプリント教材を作成した。

- *Genius English Readings*（大修館）
- *Element English Reading*（啓林館）
- *Extensive Reading for Academic Success* (Advanced A , B, C, D)
- *True Stories Level 5 : Even More True Stories* (Pearson Longman)
- *True Stories Level 6 : Beyond True Stories* (Pearson Longman)
- *The Japan News* (by the Yomiuri Shimbun)

設問の作成にあたっては前述の留意点を特に意識したが、最も苦労を要した部分である。

既成の一般的な演習問題で見られるような和訳や部分的な理解ができていれば解答できるような問題、あるいは英文を読めなくてもすでに持っている背景知識で解答できるような設問は極力避け、文脈や行間をきちんと読み取れていなければ解答できない設問の作成に努めた。他に、段落ごとに小見出しを付けさせ、それを手掛かりに英文要約・和文要約の演習を行った。

ややもすると一つ一つの英文について「ひとまず日本語に直す」作業ができても文意が分からない、全体像をつかめない、何を言わんとしているのかわからない、あるいは全体像を振り返ってまとめるのに時間がかかる生徒も回を追うごとに「読み方」「まとめ方」「伝え方」を実感として捉えられるように成長していった。

毎回の授業は、700 語～900 語の英文と平均して 7 つの設問を 20 分前後で解答する形で進行させた。その後解答解説を行った。英文によっては、求めずとも議論や意見を発表する生徒が出たこともあったが、これは学年の担任として 6 年間活動を共にしたからこそ年間の行事の流れからその時々の生徒の好奇心や関心を感じ取れていたことに寄与すると考える。以下に設問の例を挙げる。

- 導入文に続く、本文要約に適した文章を３つ選びなさい。（選択式）
- 導入文と選択した英文を使用して日本語 120 字程度でまとめなさい。
- Why does the author mention ○ ○ in paragraph 1?
- 下線部[　]内の語を日本文が表す内容に合うよう並べ替えなさい。
- What can be inferred from paragraph ○ about ○○○?
- Which of the sentences below best expresses the essential information in the underlined sentence in the passage?

リーディング、ライティング以外に高３では設定がないが、リスニングの授業を週に１度ＬＬ教室で行った。授業の構成や教材は原則的にリーディングで設定している目標と同様のものとした。具体例を挙げると、pixar 社の台詞のない短い動画を見せて、その内容を英文でまとめる、まとめられた英文を文脈に合うよう完成させるなど。台詞がないだけに自由度が高い英作文のようにも思えるが、動画の主旨や押さえなくてはならない情報は固定されるので得た情報を自分の言葉でまとめる練習には生徒も刺激を受けたようだ。また、インプットされた語彙に縛られずに既知の語彙を引き出して運用しなくてはならないので自身の語彙力および文法力確認にも役立ったようだ。

3.8.3　今後の課題

この学年に限らないが、既存のテキストに全て依存したり、生徒に予習を求めたりすることが難しい本校

の実情を考えると、どのような内容にどれだけの時間を配分するかは全て教員のさじ加減次第となり、授業の成否の分かれ目ともなる。また、英文を読んでもその内容理解について文法問題や整序問題、和訳など記号の置き換えや法則性だけで解答できる演習の授業でも同様である。教材の選択、理解の確認手段や方法などにおいては、常に生徒に刺激を与えられるものを求めるアンテナを大きく張り、より適切な内容、レベル、分量となるような教材が作成できる研究を続ける心構えを持ち続けたい。

3.9　高校 3 年生（63 期）ライティング（1 単位分）

担当：多尾奈央子

3.9.1　はじめに

６年間のシラバスのなかで最終段階の「発展期」最終学年の高校３年生。選択授業の一つであるライティング（２単位）では、共同で担当している別の担当者のエッセイライティング授業の支援となるよう、文法・語法の指導を中心に行った。

3.9.2　教材と授業での取り組み

本科目と併せてリーディングを担当する筆者がライティングの授業で設定した目標や内容も基本的にはリーディングと同じ考え方である。

単文の空欄穴埋めや選択問題（既成のものはそもそも選択肢として成立していないものも多く、四択問題であっても実質二択問題であるものが多い）は避け、文脈の中で一つの文法項目に重点を当てて設問を多く設定したり、単なる記憶ではなく持っている文法知識を運用させないと解けない問題となるよう努めた。

筆者は本期生を中１から担当しているため、生徒が英文を書く際に見せる共通した誤用に多く触れる機会に恵まれた。そのため、そうした共通する誤用の項目を反復して演習させることで意識涵養を図った。

具体的な授業内容は、各回一つの文法項目をターゲットに日常で遭遇するような場面で表現できるような文章を取り上げて空所補充、整序、不足語補充、英作文などの形で演習問題を行った。

複数の情報から一つの法則性を見出すことに長けているのが本校生徒の特長であり、そのため誤用も共通するものが見られるのは興味深い。その点、どういった点をターゲットに演習問題を作成するべきか焦点は当てやすいが、無味乾燥・日常の動的な場面がない英文を問題にしても生徒はただドリルに取り組むだけで共感を持って英文に向かえない。できるだけ生徒の日常の場面を利用した英文を設定することで少しでも心を動かせる瞬間を得られるべく努めた。問題となっている各文を見て、生徒は思い出したことを話したり、心情がうかがえるような語彙を選択したり、文構造で書いたりしていた。

海外在住経験を持つ生徒も本期生には多く、そういった生徒が経験上知っている英文も現実に使用されている英語であることに間違いはないが、大学入試を向かえる彼らにとって正規用法とされる英文を最低限正確に書くことができるように設問作成の工夫に努めた。そのために使用した文法書や設問作成に参考にした書籍は巻末に挙げる。

和書および洋書を併用したが、洋書の方がより日常で実際に遭遇する場面が多く、設問作成に役立った。それを和書の文法書で確認し、活用辞典（研究社）で語法を調べ、英文を設定した。一つの設問作成にかなりの時間がかかることとなったが、多くの英文に触れ、筆者自身が大変勉強になった。本校生徒は大変細かなことに対して疑問を抱くが、かなりの部分で説明できたことは成果である。ただ、各種辞書で例文を見ても必ずしも答えが見いだせるものばかりではないのでリアルタイムで協議できるネイティブの教師が本校にいれば、と強く願いを新たにした。

3.9.3　今後の課題

大学入試に向け塾に通い、通信教育などでたくさんの演習問題に取り組んできた生徒が多い中、筆者の作成する設問の英文は表現しづらいとよく言われるが、これは外国語学習が「語の置き換え」作業に終始されていることに要因があると考える。「実践力」とは何かが毎時間感じられるように場に応じた速いレスポンスが英語でできるよう、また、場に応じた「語・表現」を選択使用でき、聞き手に発信者の意図が最大限伝わるような表現力が着くように授業の組み立てや教材の開発を行うべく研究を継続させたい。

3.10　高校 3 年生（63 期）ライティング（1 単位分）

担当：山田忠弘

3.10.1　概要

英語Wの Writing パートでは、20～80 語程度の自由英作文練習を行っている。授業では自作プリントを用いて２問程度の演習を行い、その日の課題（出席確認を兼ねる）で 40 語程度のものを提出させ、翌週に添削して返却している。また別に月に１回、70～80 語の課題を課してこちらも添削をして返却している。

いずれの課題でも「日本語できちんと骨子を作る」「できるだけ平易な語彙・構文」「動詞の形を意識する」といった当たり前のことを繰り返し指摘し、意識させるようにしている。

４　総合学習での取り組み

4.1　概要

本校では総合学習の一環として、中学３年生に「テーマ学習」、高校 2 年生に「ゼミナール」という時間を設け、土曜日を活用しながら、普段の授業では扱えない内容を取り上げて、それらを専門的に深めていく学習を行っている。各教科がそれぞれに対して担当者とテーマを提案し、生徒は自分がやってみたいものを選択して参加するシステムで、ひとつの講座で学ぶ生徒の人数は概ね 10～20 名程度である。

英語科は、第３期目に入った本校ＳＳＨの重点目標のひとつ「グローバルサイエンティストの育成を目指す」を意識して、日本学術振興会（ＪＳＰＳ）が提供する『サイエンス・ダイアログ』というプログラムを利用しながら、「国際社会において、受容・発信する能力の育成」に努めている。

このプログラムの詳細についてはＪＳＰＳ のＨＰ（http://www.jsps.go.jp/j-sdialogue/）に詳しい。

4.2　中学３年生（66 期）テーマ学習

今年度の講座名は「Science Dialogue Jr.」である。

本講座の目標は（1）海外からの若手研究者に自分の国や経歴・研究内容について英語で講演していただき、彼らと積極的にコミュニケーションを図る、(2) 同時にプレゼン技術についても学ぶ、(3) (1)(2)を踏まえて自分が研究したことを英語で発表する、の３つである。生徒にとって毎回の講演テーマは内容が深く専門的で、英語での理解が易しいとはいえないが、研究者の方々の工夫（簡単な実験を行う、映像を見せる等）によって、大体の内容は理解できている。

また、若手研究者の発表以外にも、「先輩に学ぶ」として海外研修派遣経験のある本校高校３年生から上手なプレゼンのやり方や効果的なスライドのつくり方について手ほどきをしてもらったり、イングリッシュ・ルーム（別述）で講師をお願いしている東大大学院留学生にプレゼンのコーチングをしていただき、大きな成果をあげている

今年度の講義内容は以下の通りである。

表 1. Science Dialog Jr. 年間計画

Date	Speaker	Topic
①June 7	―	全体オリエンテーション *各教科からの説明を聞き、自分の参加したい講座を選ぶ
②June 21	本校高校3年生(2013年度SSH台湾研修派遣生徒)	効果的なプレゼンのコツ
③Sept. 13	Dr. Szollosi (Hungary)	数学（複素アダマール行列）
④Sept. 27	Dr. Kovacs (Hungary)	数学（ディオファントス方程式）
⑤Oct. 18	Dr. Delamarre (France)	電気電子工学（ＬＥＤと太陽電池）
⑥Jan. 17	Dr. Smid (Czech)	環境学（燃料電池）
⑦Feb. 7	受講生徒自身のプレゼン	各自の興味に応じた内容

4.3　高校２年生（64 期）ゼミナール

高２ゼミナールでは、「Science Dialog & DIY」と銘打ち、中３と同じく『サイエンス・ダイアログ』を利用しつつ、TED をお手本にして人の心をつかむプレゼン方法の研究をし、*Ideas Worth Spreading* を標語に”TEDx Tsukukoma”を開催することを最終目標とした。

以下が、今年度ゼミナールの概要である。

表 2. Science Dialog & DIY 年間計画

Date	Speaker	Topic
①May 10	―	全体オリエンテーション
②May 31	Dr. Mamo (Australia)	地球惑星科学（深海底生生物群集）
③June 14	Dr. Bertalanic (Slovenia)	政治学（戦争捕虜）
④June 28	Dr. Cojocaru (Moldova)	材料化学（太陽電池）
⑤Oct.4	Dr. Jongkees (New Zealand)	生物分子科学（低酸素誘導因子と特殊ペプチド）
⑥Nov. 15	Dr. Gines (France)	ナノマイクロ科学（群ロボットの研究）
⑦Jan. 10	受講生徒自身のプレゼン	*TEDx Tsukukoma*
⑧Jan. 24	Dr. Felix G. Marx (Austria)	地球惑星科学（ヒゲクジラ類の進化における多様化と懸隔化）

５　国際交流を支援する取り組み

5.1　プレゼンテーション・スキル・ワークショップ

昨年度に引き続き、サイエンス・コミュニケーション・スペシャリストとして活躍中の Mr. & Mrs. Vierheller 氏を招き、希望者を対象とした英語での効果的なプレゼンテーション・スキルについて学ぶワークショップを第１学期期末考査後に開催した。

“Learn to Present”と題された本講座には中３から高３まで約 60 名の生徒が参加し、異学年集団を形成してグループごとの発表活動に取り組んだ。指導の中心は聴衆を引き付けるためのさまざまなスキルであった。具体的にはスピーチをする際の声の強弱、イントネーション、アイコンタクト、身振りなどについて、実際にグループで発表をしながら指導して頂いた。

３時間ほどのまとまった時間で達成感を得ることができ、普段の授業ではなかなかできない取り組みである。なお、３学期には昨年同様、中１・２を対象とした「ビギナーズ用ワークショップ」を開催する予定である。

5.2　台湾国立台中第一高級中学との研究交流（12 月 9 日～14 日）

5.2.1.1 事前指導

台中一中との研究交流は６年目を迎え、英語科としても事前指導のノウハウが年々蓄積されてきた。定番の Gary & Sachiyo Vierheller 夫妻にによるプレゼン指導に加え、昨年度よりイングリッシュ・ルームの先生方に原稿を作るところから指導を受けることができるようになり、大きな成果をあげている。

5.2.1.2 事前指導の内容

11 月後半より派遣生徒の一部が、イングリッシュ・ルームの時間を使って講師の先生方による発表原稿のチェックを受け始めた。専任教員にはなかなかその時間的余裕がないため、このように外部講師の協力を得られることは大変ありがたい。

渡航直前の 12 月 6 日(土)には Vierheller 夫妻によるプレゼン全般にかかわる指導を３時間受け、声の出し方・目線の使い方・体の使い方・聴衆とのインタラクションの取り方・スライドのつくり方など、多岐にわたって詳細なアドバイスをいただいた。２日後の 8 日(月)には、各自が土曜日の指導を受けて修正してきたものをイングリッシュ・ルーム講師３名に見ていただき、さらなるブラッシュアップを図った。

Vierheller さんとイングリッシュ・ルーム講師との間でアドバイスの内容が食い違う場合もあるが、各自が自分の事情にあわせて適宜取捨選択するように、という助言も行った。また、他人のプレゼンを聴いた後は積極的に質問をするように、ということも折に触れ指導している。

5.2.2. 本番の様子

今回の研究交流では過去に例をみないほど発表後の質疑応答が盛り上がり、プレゼンの仕方も年を追うごとに洗練されてきていることが見てとれた。生徒は発表前日の夜もホテルの会議室を借りてプレゼン予行を行っており、そこでは生徒同士で真剣にアドバイスをしあう姿を見ることができた。事前指導の内容がしっかり身について自分のものとして消化できている証拠で、今後の彼らの切磋琢磨と成長がいっそう楽しみである。

数学に関する発表

ペアでの音楽理論に関する発表

5.3　韓国・釜山国際高校との交流へのサポート

5.3.1　はじめに

本校は SSH 校として上述のように台中一中との研究文化交流を続けているが、これは主に理数科に興味

のある生徒中心のプログラムである。昨年より、筑波大学から「附属学校のグローバル化に資する事業」として「アジア諸地域の教員・生徒と本校教員・生徒との研究交流の促進」として予算をいただき、その一部を文系に興味のある生徒のためのプログラム開発に充てている。2013 年 1 月に釜山国際高校より本校に初の訪問団が訪れ、また 2013 年 3 月に本校から先方を訪問し、相互交流が実現することとなった。

英語科では本校より訪問する生徒のプレゼンテーション指導、および先方より来訪する際のコーディネート等に力を注いでいる。

5.3.2　釜山国際高校の本校訪問

2014 年 1 月 23 日に先方より徒は、8 名、引率教員 2 名が来訪した。来訪生徒は本校の授業に参加したり、本校生徒と昼食を共にしたりするなど、交流の機会を持った。

5.3.3　本校生徒の釜山国際高校訪問

2014 年 3 月 25 日～29 日に、本校生徒 10 名、引率教員 3 名で韓国・釜山を訪問した。

期間中は釜山国際高校への訪問を始め、韓国科学アカデミーへの訪問、また釜山・慶州での見学・フィールドワークを実施した。

5.3.4　今後の課題

相互訪問が定着しつつあるが、まだ手探りで行っている部分も多い。今後、活動を積み重ねていくことにより、双方の学校・生徒により望ましい還元の道筋を探っていくこととなろう。

5.4　イングリッシュ・ルーム

筑波大学より「放課後などに利用して生きた英語のコミュニケーションを生徒にさせる機会を増やす」という目的で財政的支援を得て、「イングリッシュ・ルーム」というプロジェクトが昨年から始まり、今年度は２年目である。

本校では、近隣に東京大学の留学生ロッジがあり、そこに住んでいる大学院留学生に協力を依頼して、このプロジェクトを行っている。英語科スタッフ自ら面接を行い、７名の留学生を採用したのである。出身もパキスタン、インド、ルクセンブルク、フランス、マラウィ、ナイジェリア、米国と全世界にわたっており、専門も土木、IT、薬学、統計学、環境問題、原子力、コミュニケーション論、と様々である。今年度は、卒業した 2 名の留学生に変わって 3 名の新たなメンバーが加わった。フランス、米国、それに海外での生活が長い日本国籍の方である。

通常は毎週火曜日 3 : 30～4 : 30、希望者を対象に、small talk やゲームをしている。また、テーマ学習の「サイエンス・ダイアローグ Jr」では発表活動の指導もしてもらったり、台中一中や釜山国際高校との交流での発表の際も、事前に原稿のチェックやプレゼン練習等で指導をしていただいている。今年は、前もって交流に行く生徒たちにアナウンスをしておいたので、原稿チェックなども昨年度よりスムーズであった。

また、海外交流をしてきた生徒たちが、イングリッシュルームで帰国報告をすることで、イングリッシュルームに参加している中学生にフィードバックしたり、あるいは講師からの質問などに答えることにより、帰国報告した生徒たちがまた鍛えられる、というシステムが出来つつある。

放課後は、生徒たちも意外と部活動などで忙しく、また活用する生徒も限られているので、それをいかに多くの生徒に還元し、魅力的なプログラムにしていくかを考えていきたい。

5.5　TOMODACHI 東芝アカデミー（TTA）

昨年まで東芝地球未来会議（Toshiba Youth Conference）として 4 カ国の高校生が集い、環境問題について討論したのであるが、今年からは日米２カ国の高校生参加となり、「科学技術を通じて将来世界に起こりうる複雑な課題を解決していけるように」設定されたプログラムである。

日米それぞれ 8 名の生徒が参加し、日米混合の４つのチームに分かれて、大きく分けて２つの課題に挑戦をした。

１つは「タワーチャレンジ」: ストロー100 本を用いて、なるべく高くて見た目も美しく、横からの風力に強く、地面の揺れに強いタワーを作る、というもので

ある。物理学的な知識が要求され、ストローをどのように組み合わせたら崩れにくい構造の建物ができるかを競う。

もう１つは、「スマート・コミュニティ」：世界の任意の街や都市を選び、そこで自然災害などが起こったとき、どのような形で復興させスマート・コミュニティを作り上げるか、のプレゼンテーション。

いずれも、単に英語が出来るだけでなく、価格や数学の知識が要求され、非常にチャレンジングなプログラムであった。

6. おわりに

以上概観したように、本校での国際交流の活発化とともに英語科が担う部分が拡大してきた。生徒のプレゼンテーション能力の向上に向けてさらに工夫をこらしていかねばならない。英語科には「国際交流＝英語科」ではなく、全校として取り組む課題という認識があるが、現実には英語科がかかわる部分が依然として大きい。今後、他教科の先生方をいかに巻き込み、全校的な関わり方を築いていくかが課題である。

【参考文献】

松本茂他（2009）『英語ディベート　理論と実践』玉川大学出版部

Murphy, Raymond（2012）『マーフィーのケンブリッジ英文法（初級編）新訂版』Cambridge University Press

斎藤雅久(2012)『教養の場としての英文読解』游学社

玉井健(2005)『決定版　英語シャドーイング入門編』、コスモピア株式会社

手島良（2004）『英語の発音・ルールブック』NHK 出版

東京大学教養学部英語教室編（1993）*The Universe of English*　東京大学出版会

JACET　教育問題研究会編(2008)『新英語科教育の基礎と実践』三修社

Radford (2008)　*English Syntax*　Cambridge

竹林滋・斎藤弘子(2010)『英語音声学入門』大修館書店

松坂ヒロシ（2004）『英語音声学入門』研究社

＜副教材・テキスト類＞

中学１年生

『耳からはいるペンマンシップ E-NAVI』秀学社

『5-STAGE 英文法完成 BOOK1』数研出版

Listen First　Oxford University Press

Let's Go to the Rainforest　Oxford University Press

中学２年生

Twenty Thousand Leagues Under the Sea　Pearson

Basic Tactics for Listening　Oxford University Press

中学３年生

Martin Luther King　Oxford Bookworms

Romeo and Juliet　Oxford Bookworms

Basic Tactics for Listening　Oxford University Press

中学共通として

NHK ラジオ『基礎英語１』、『基礎英語２』、『基礎英語３』NHK 出版

高校１年生

『*Enjoy Simple English*　2014 年４月号』NHK 出版

Greene, Bob (1983)　*American Beat*　Penguin

Beowulf（retold by Victoria Spence）Black Cat

The Body（retold by Robin Waterfield）Penguin Readers

Kirkup, James (1984)『ギリシャ神話』（*The Glory That Was Greece*）成美堂

Ovid（1954）*Metamorphoses*（translated by Rolfe Humphries）Indiana University Press

Wilkinson, Philip (2009) *Myths & Legends*

Dorling Kindersley
『攻略！　英語リスニング　2014 年 4 月号』
NHK 出版

Expanding Tactics for Listening
Oxford University Press
Discover Debate　Language Solutions Inc.

高校 2 年生
A.Milne『くまのプーさん』講談社
E. Bronte *Wuthering Heights*　Oxford Bookworms
The Story of Ruby Bridges　Scholastic Trade
The Diary of Anne Frank　The Definitive Edition
Penguin Classics
Nancy Sakamoto & Shiyo Sakamoto
Polite Fictions in Collision　金星堂

高校 3 年生
READING
Genius English Readings　大修館
Element English Reading　啓林館
Extensive Reading for Academic Success
Advanced A ~ Advanced D
True Stories Level 5 : Even More True Stories
Pearson Longman
True Stories Level 6 : Beyond True Stories
Pearson Longman
The Japan News　(by the Yomiuri Shimbun)

WRITING
（多尾）
Crown English Writing　三省堂
江川 泰一郎（1991）『英文法解説』金子書房
佐々木 高政（1981）『和文英訳の修業』文建書房
綿貫他（2000）『ロイヤル英文法』旺文社
Michael Vince (2010) *Advanced Language Practice: English Grammar and Vocabulary*
Michael Swan (1997)
How English Works: A Grammar Practice Book
Michael Swan & Catherine Walter (2003)
The Good Grammar Book

（山田）
Basic Tactics for Listening
Oxford University Press
Expanding Tactics for Listening
Oxford University Press
Solutions (2009)　CENGAGE Learning
『究極の英語リスニング Vol.1』(2008) アルク